

東北土を考える会 夏期研修会を開催しました

2026年8月31日

東北土を考える会は、7月23日・24日に夏期研修会を開催しました。

今回の研修会では、宮城県登米市、岩手県花巻市、北上市の「乾田直播」実践ほ場4カ所を巡り、各実践者から栽培の概要や取り組み内容について説明いただいた後、意見交換を行いました。乾田直播栽培への関心の高さから、東北6県をはじめ東北以外の地域からの参加者も加わって、総勢116名が集まりました。

東北土を考える会では、長く「乾田直播」をテーマに取り組んでいます。乾田直播栽培は「一粒が持つ生命力を最大限に引き出す」として、まだ栽培技術が確立されていなかった平成9年頃、秋田県大潟村で乾田直播への挑戦を始めた矢久保英吾氏を先駆けに、その挑戦に影響を受け共感した方々が取り組みを続けて広げてきました。

こうした実践者の積み重ねにより、近年では栽培技術が確立されつつあります。しかしその一方で、情報発信の広がりにより、正しい情報を見極める難しさも生じています。清水会長は開会の挨拶で、「SNSやインターネットで乾田直播に関するさまざまな情報が発せられるようになり、正しい情報を掴みきれない状況もある。先進的な地域から学び、実践者それぞれの取り組みから少しでも情報を得て、それぞれが実践する乾田直播に生かすための勉強の機会としてほしい」と参加者へ呼びかけました。



清水会長

Day1

<宮城県>

①(株) 宮城白鳥農場

先代から乾田直播に取り組む、今年で7年目。

自身で区画整備を行い、大区画化したほ場を活用しています。

「乾田直播と節水型乾田直播を実践」

通常の乾田直播栽培に加え、「節水型」乾田直播栽培も実践。

今回は、異なる栽培方法で同時期に播種した2つのほ場を視察し、生育状況の違いを確認しました。白鳥さんからは、「漏水」という課題を抱える中で「雑草に負けてしまった」と振り返り、「さまざまな情報に惑わされてしまった」と率直なお話がありました。特に「節水型乾田直播」については参加者の関心が高く、「水管理は実際に楽になるのか」など、白鳥さんの経験に興味を持つ質問が多く寄せられました。



(株) 白鳥農場
白鳥一徳氏



「節水型」乾田直播ほ場

研修会当日も
解説!



スガノ農機 齊藤義崇 顧問によるひとくち解説「水稻栽培と水の関係」

稲は「ケイ酸植物」と呼ばれ、ケイ酸を多く吸収する作物である。ケイ酸は根から茎、葉、籾へと運ばれ、水分の蒸散を繰り返し、凝縮することで茎葉を硬くする。これが風雨からの倒伏を防ぎ、稲は病気や害虫、低温や高温・乾燥から身を守る。稲にとって、特に重要な栄養素であり、必要不可欠な成分と言える。

ケイ酸は砂や岩石の主成分であり、自然界に豊富に存在するが、稲が吸収できるのは主に水に溶けた形態のケイ酸だけである。雨水や融雪水は、長い時を経て山間地の岩や砂を溶かし出し、河川に集まり流れ灌漑水となる。水稻は水田でその水を吸収し、健全に生育する。水稻は元来、水に恵まれた環境の中で進化した。水中に溶けたケイ酸を大量に吸収することで厳しい環境に負けない体を作ってきた。水不足の環境では、ケイ酸が不足し、稲の健全な生育に影響を及ぼす懸念がある。あらためて重要性を認識し、対応すべきと考える。



A班

② (有)エヌ・オー・エー

2.1haの大区画ほ場を視察しました。

「排水と均平という基本作業を徹底する」

もともと重粘土の特性を持ったほ場に対し、溝掘り、プラウ等による排水対策を進め、長い時間をかけて土質の改良に取り組んできたことで「乾いた状態で適期に作業を行うことができるようになった」経緯について説明されました。

現在では土壌構造が発達した作土層が形成され、深耕を行わなくても土をほぐす程度の作業で対応できるなど、土質の変化に合わせて作業方法を更新しているとのことでした。

また、適期作業を行うためには「水との駆け引きが重要」と考え、コの字型の明渠を掘ることで迅速な排水を可能にして、大区画ほ場でも速やかに水管理ができるようにする工夫、さらに、溝掘り後に余った土を均等に散らすなど、ほ場均平の徹底についてお話しされました。

基本技術を積み重ねた結果、力強い稲づくりにつながっていることに、参加者から多くの質問が寄せられました。

(有)エヌ・オー・エー
高橋伸氏



Day2

<岩手県>

③ (株)みちのくクボタ

播種方法や条間条件を変えて実践している、6パターンのほ場試験について報告いただきました。

播種方法(ドリルシーダ、ロータリーシーダ、不耕起播種)、条間(15、30cm)、初冬播種といった条件を変えて行っており、雪国特有の雪解け後の時間がない中での初冬播種、耕起の有無、耕起方法の違いが雑草防除に与える影響などを観察しました。



(株)みちのくクボタ
八重樫耕一氏



6つの実証ほ場

④ (株)西部開発農産

視察ほ場について、これまでの取り組みの経緯や現在抱えている課題について説明されました。

「さまざまな試行錯誤を重ねる」

作業負担や作業時間の軽減を目的に、除草剤の少量散布に挑戦され、「雑草に負けそうになった」経験についてお話しされました。

また、収量向上には土壌分析が重要であると考え、分析結果をもとに土壌改良にも取り組んでいるとのことでした。

作業面の課題として、積雪地域特有の雪解け水を早期に排水するための溝掘り、大型機械による踏圧の影響について挙げられました。

特に、ほ場進入路では土壌が硬く、プラウ作業でも設定通りの耕深を確保できないため、深耕プラウを導入して土をほぐす取り組みを進めている、との説明がありました。

機械トラブルが発生し別の作業機で対応した経験談も交えながら、一つのほ場に対して多方面から改善に向けた取り組みをされているお話に、参加者は熱心に耳を傾けていました。



清水会長自ら説明

研修会後は花巻温泉にて懇親会を開催。他地区からの参加者や関連企業も含めて交流を行い、内容の濃い2日間となりました。



B班